
広大な青

泰兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

広大な青

【NZコード】

N8616D

【作者名】

泰兎

【あらすじ】

蒼穹家の跡継ぎ、周。彼とその友人、慶と恋は突如異世界へと召喚されてしまう。そこから始まる、剣と魔術を交えた異世界召喚物語。

プロローグ

それは、昔の出来事。

ファンクイン大陸全土を巻き込む、大きな戦争が起きた。始まりは、小国同士による些細な争いであつたが、同盟を組み、規模を広げ、次第に全ての国を巻き込んでいった。

時と共に戦火は強まり、徐々に深刻化していく。

事態を重く見た一人の人物が、戦争を止めようと各国々へ投げかけ始めた。

その人物の名は、『ファレス・ヴァロイエ』。

年老いていたものの、彼は稀代の魔術師として名を馳せ、その力は神をも凌ぐと言われた。

強大な力とは裏腹に、彼は争い事を嫌い、仲裁役として大陸を渡り歩いたのだ。

ファレス老により、戦火は收まり始めていた。

しかし、そんな最中。

『ファレス・ヴァロイエ』を邪魔と考えたある国の王は、彼を排除しようと軍隊を差し向けた。

千近くもの大軍に、その力を持つて彼は一人で果敢に立ち向かう。しかし、ファレス老の体は病膏肓としていたため、途中力尽き敗れてしまつた。

結果、再び大陸には火が舞い始め、事態は更に深刻な方へと進んだ。そんな時、一人の少年が戦争を止めようと、新たに立ち上がつた。その少年は、自身を『ファレス・ヴァロイエ』の息子で、『ヴァイテン・ヴァロイエ』だと名乗つた。

『ヴァイテン・ヴァロイエ』の力は、ファレス老の力を遙かに上回り、魔術のみならず、剣や体術を使いこなす程だ。

多少強引ながらも、少年により戦争は收まりを見せ始めた。

そして、遂に。

戦争を終結させようと、各国の代表が集まり、和平を行なつたのだ。
その場には、少年『ヴァイテン・ヴァロイエ』も呼ばれていた。
和平交渉は、滞ることなく進んだ。

国交の回復、各町村への援助等が決まり、無事終了した。

が。

突如、その場に居た一人がナイフを取り出し、少年へと刺した。
人の力を超えた少年に畏怖したため、行つたこと。

『ヴァイテン・ヴァロイエ』が怖い。

ならばどうするか。

殺し、消してしまえば良い。

居ない者に、恐れることはない。

そんな短絡的であるも、人の根元とも言える思考の結果が、その人物を動かした。

血を流し、倒れる少年。

しかし、彼に近寄る者は誰もない。

他の人物も、同様の思いを抱いていたから。

聰明であつた少年は、その意味を悟ると、己の力を使つた。

空から降る一筋の光。

光は少年の内へと入り込むと、彼を中心に目が眩む程の輝きを、周囲へと放射した。
光が止むと、その場に『ヴァイテン・ヴァロイエ』の姿はなく、床に広がる血の痕が残されただけだった。

少年が消えたその後、大陸全土に終戦の知らせが撒かれが、流布された知らせの中には、『ヴァイテン・ヴァロイエ』の名は無かつた。しかし民衆の間では、少年を戦争を終結へと導いた英雄として崇めた。

第一章

秋空。

空は雲一つ無く、秋の空を澄み映す。

夏の暑さも消え失せ、冬へと向かい進むにつれてその寒さが肌に当たり、秋冷を感じさせる。

涼しく心地よかつた風も、いつの間にか身体を震わせる程に冷たくなっていた。

「大安吉日、天氣は快晴。世は全て事も無しつてね」

空を見上げ、一人呟く少年。

平均的な身長に、平均的な身体付き。

髪も瞳も、色は黒

中性的な顔立ちで一見女の子にも見えるが、至つて普通の少年。物語は、彼を軸にして動き出す。

「さてと、ぼちぼち学校にでも行こうかな」

上に向いていた視線を下げ、正面へと戻す。

両手で包むようにして持つていた湯飲みを、隣に置いてあるお盆の上にそっと戻した。

うーん、とバンザイをする様に両手を上げて伸びをする。

そんな彼が腰掛けるのは、敷地内だけで一般的な家が何軒も建ち並ぶであろう程、大きな屋敷の縁側。

庭は『和』という文字をそのまま表しており、日本好きの外国人に見せたら興奮すること間違いないし、な作りをしている。

「周^{あまね}、もうそろそろ時間ですよー」

「行こうかな」などと言いつつも、未だ動こうとしない周に、後ろから若い女性が声を掛けた。

「うん、母さん」

母と呼ばれたその女性、見たところ二十歳前後といった容姿である。

だが、実のところ歳は三十代後半。

本人は「肌が…、皺が…」と、年齢の増加に伴う皮膚の悪化を甚だ気にしているようだが、周からしてみるとクラスの女子と然程変わらなく見える。

それどころか、よっぽど艶やかな肌をしている。

以前そのことを母に伝えると、何故か酷く怒られたので触れないことにした。

周にしてみれば、褒めたつもりだったのだが。
どうやら、彼女にしか分からぬ差異があるようだ。

「父さんは？」

立ち上がり、壁に立て掛けた鞄を手に取る。

いつもなら並んでお茶を飲むのだが、今日は隣に居なかつた。
早起きの父に限つて、まだ寝ているということはありえないでの、
どうしたのか気になつていたのだ。

「利名さんなら、もう道場に向かいましたよ。行く前に声を掛けて
あげてね」

「分かつた。それにしても珍しいね、父さんがこんな早く道場に行
くなんて」

今はまだ八時前。

利名が道場へ向かうのは、早くて九時を過ぎてからだ。それを知
つている周は不思議に感じた。

そんな周の疑問に、母六花^{りっか}が少し思案氣味に答える。

「そうねえ…。でも利名さんがいふには、大事なお客様が来るから、
つて

「大事な、ね…」

道場の開ける時間を早めてまで迎い入れる程の人、ということだろうか。今までそういう人物がいなかつた訳でもないが、片手で足りる程の人数であり、来ても数年に一度ほどだ。

「ほらほら、急がないと遅刻しちゃいますよ」

言われて時計を見れば、いつも出発する時間の少し前。

父の所へも寄るので、そろそろ行かないと母の言つ通り遅刻になつてしまつ。

それだけは避けたいと思い、駆け足で玄関へと向かつた。

まだ固さの残る革靴に、靴べらを使って強引に押し込む。

「それじゃあ、行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい。ちゃんと利右さんの所へ寄つてあげてね」

「分かつてるよ、道場だよね」

繰り返し言われたことに多少煩わしく感じながらも、自分が忘れないう注意してくれていることに感謝。

出入り口を開け、もう一度

「行つてきます」と言い外へ出た。

先程縁側から見上げた時と変わらず、雲一つない晴れ空。

「いい天気だなー。つと、あんまりのんびりしてられないんだつた」

そう言うと周は鞄を脇に抱え、ジヤツと地面に敷き詰められた砂利を踏み鳴らし、道場へと駆けた。

蒼穹家の道場は、他の道場より比較的小さい。

昔は今の数倍あつたのだが、老朽化が進み建て直した際に、建物のサイズも小さくした。

元々多くの門下生を取らない中、道場だけ大きくて勿体無いと、利名が縮小化を決めたのだ。

おかげで掃除が楽になつたと門下生達は喜んだが、それを聞いた利名が悪戯心から季節外れの大掃除を命じた事があつた。

しかしそれは、あくまでも余談である。

「父さん、俺もう学校に」

道場に居ることは聞いているので、声を掛けながら入り口を開く。

しかし中には誰もおらず、周の声だけが響いた。

「あれ、居ないや。母さん間違えたのかな?」

しかつり者の母が、こんな凡ミスをするとは思えないのだが…。
しかし、実際中には誰もいない。

父はどこへ行つたのやう。

時間が無いことを忘れ考え出した周の背後に、男が近付いた。
初老程の男は白髪も多く、口元や耳尻など所々に皺が見受けられ年
を感じさせるが、背筋はピンと真っ直ぐで堂々と歩くその姿は、見
た目とは懸け離れている。

「おい、周。何をしてこらんだ?」

「うわあつ！」

不意に話し掛けられ、周は驚き声をあげた。

「父さん…、脅かさないでよ」

はあ、と安堵の息を吐き、利名へと文句を言ひ。

「別に脅かしたつもりはないぞ。お前が勝手に驚いたのだろう」

「まあ、そうだけど…」

だけど、後ろから急に声を掛けられれば誰だつて驚くに決まつてい
る。

と心中で言葉を続ける。

口に出す勇気はないが。

「それで、どうしたんだ? 学校へ行く時間だと思つが」

「あ、うん。だから父さんに一声掛けてから、と思って」

「わざわざすまないな。今日は一緒に茶も飲めなかつた」

毎朝息子とお茶を飲むことを、楽しみにしている利名。今日はそれ
が出来ず、少し残念そうな顔をした。

「いいよ、また明日もあるし。こんな早くから準備するぐらうい、大
切なお客さんなんでしょう？」

「何で知つて　ああ、六花から聞いたのか

「うん」

「昔からの友人でな、頼みがあると久々に連絡が来たんだ」
顔を綻ばせ、昔を懐かしむように郷愁に浸る。

こんな様子の父を始めて見る周は、その友人に会つてみたくなつた。

「それとだ、お前にも同席して貰つから、今日は午前中で抜けて来なさい」

「えつ、俺も？」

予想外の言葉に、思わず素の反応をしてしまつ。

「ああ、ぜひお前も会つてやつて欲しい」

「…何か企んでない？」

そんな大事な客に、そもそも簡単に会わそつとする」ことを訝しむ。

普段なら大事な客が来ると決まって、道場へ近寄ることを禁じられてきた。

それこそ、自分の顔を見る度にだ。

ところが今回に限つて、学校を早退してまで同席をせるとは、ビックリおかしい。

そう考えた結果、ついこうした言葉が出てしまつた。

「企むとは何を言つか。ただ、成長した息子を見せたいだけだ」「イマイチ納得出来ない周だが、疑ついても仕方ないと素直に了承の返事をした。

後に、その安易さに後悔するのだが。

父とも別れ、学校へと向かう。

腕時計を見ると、時間は既に予鈴十五分前。

「あちやー、長く話し過ぎちゃつたな。遅れるわけにもいかないし…走るしかないか」

家から学校までは近いので、走ればまだギリギリ間に合ひ。朝から運動はしたくないのだが、状況が状況。

周は家を出た時同様に鞄を脇に抱え、走り出そうとした

瞬間。

「やつほ、あまね。今日は随分ノンビリじゃん

またしても後ろから、突然声を掛けられた。

声の主は分かつてるので、振り向いて返事をする

つもりが、先に背中をバシソッと叩かれてしまい、思わず踏鞴を踏んだ。

「痛いなあ、恋^{れん}」

「気にしない気にしない」

眉を顰めながら改めて振り返り、背中に受けた痛みを訴える。

しかし恋と呼ばれた少女は、そんなこと氣にも留めず笑って流した。

恋は、利名が開く剣道道場の生徒だ。

元々彼女の兄が通っていたのだが、それに釣られるようにして恋も入ってきた。

今では子供が増えたものの、その頃は同年代があまり居らず、その上兄も止めてしまったため、話し相手どころか練習まで大人相手にすることが多くなってしまった。

それを見かねた周が声を掛け仲良くなり、今のよだな良好な関係に至っている。

叩かれた部分を摩りながら、周は逆に聞き返す。

「そういう恋こそ、今日は遅いね。珍しく自転車に乗っちゃって」「でしょー?なんか目覚まし壊れててさあ。それでも起きたのは、習慣の賜物つてやつだね」

自転車に跨りながらも、両腕を組んでウンウンと一人頷く。

「起きたのに、なんで遅刻しそうなの?」

「寒くて布団に包まってたら、また寝ちゃつて…」

テヘヘと少し恥ずかしそうに笑うと、それを誤魔化す様に時計を見た。

「おつと、こんな所で話してる場合じゃないよ。そろそろ本格的に時間がヤバくなってきてる」

恋は自分の腕に巻かれた、じつに腕時計を周に見せる。

それを見た周も、本當だ、と焦った様に同意した。

「これじゃ、流石に走つても間に合いくつうにないかな」

困ったように、後頭部を見た搔く。そのままチラリと視線を動かし、恋に声を掛ける。

「ねえ、恋…」

「イイけど、一つ貸しね」「

周の意図を察し、自転車から降りる。

「オッケ。あ、でもこの前英語の和訳、代わりにやつてあげたよね。
つてことでチャラ」

「あつ…、そう言えばそうだった。フツーに忘れてたあ
受け答えながら周は自転車のサドルに跨る。周に続いて、恋も後ろ
に乗った。

「運転手は君、車掌は僕~つね。よーし、急げ運転手！」

「ラジヤツ！ それじゃあ、行くよー」

ペダルに足を掛け、グッと力強く踏み込む。

回るペダルに連動してチヨーンも回転し、それに伴つて後輪を動か
す。

車輪は、回り出した。

第一章（後書き）

懲りずにも、またやつてしましました。今度はファンタジーです。異世界召喚物が好きな私としては、書かずにいられませんでしたのですよ。と言つても、以前よりちょこちょこと書いていたので、まだストックがあります。あまり勇んで書き出すと、別物が滞るので控えめにいきます。反応を頂けるようでしたら、早めの投稿を考えています。また、周を主役とした某ゲームのパロディも書いてます。ただ、ストーリー上こちらが進まないとネタバレになるので、それまで書けませんが。ちなみにその某ゲームは、PS2化・アニメ化・コミック化が決定しているようなので、それまでには間に合わせたい心情です。では、また。

第一章（前書き）

感想など頂ければ、嬉しさから悶絶します。

「なんとか間に合つたね、周」

「…………うん」

「だ、大丈夫?」

心配そうに、隣の席から話し掛けた恋。

「…………ない」

それに対する返事は素つ気なく意味も良く分からぬのだが、恋は怒ることなく、寧ろ余計に心配そうな顔つきで周の様子を窺つている。

あの後、周は凄かった。

学校まで自転車でも十分は掛かるところを、その半分の五分で着かせてしまったのだ。

平坦で割と楽な道ではあるものの、後ろに一人を乗せてそのハイペース。おかげで今は返事すらともに出来ず、机に突つ伏している。

「よつ、周。朝っぱらから大変だな。後ろに重たい荷物乗せて来たんだろ?」

付した周の頭上から降らしたのは慶^{けい}といい、彼もまた利名の開く道場の生徒だ。

慶は小学校低学年から始めた恋とは違い、中学に上がると同時に道場へと通い出した。

元々才能があつたのか、同じ練習量にも関わらず恋を追い抜き、今では道場内で上位に位置するまでになっている。

「はつた、重すぎてタイヤがパンクしちゃうつて　このばか

「いってえつ!」

恋は机の上に置いてあつた筆箱を、躊躇つことなく慶の顔面へと投げつけた。

大きな音を起してぶつかった筆箱は、慶の顔から滑りそのまま周の後頭部へと落ちた。

「…………いて」

まだ疲れているらしく、反応が薄い。

「ああっ、『じめんね周、怪我はない！？』

慌てて駆け寄ると、周の頭の上に乗ったままの筆箱を除け、優しく頭を擦つた。

「…おい

慶が声を低くして呼ぶが、恋はそんなもの聞こえていないかの様に全く反応を示さない。

恋にとつてはそんなことより、未だ伏したままの周の方に気が掛かっているようだ。

「おいつテメエ！周より先に、俺に言つことがあんだろ！」

「ない」

振り向きもせず、即答。

対応の差が余りにも酷い。

クラスの女子は、自身の知らぬところの人気を得ている周を心配し、男子は恋に文句を言う慶に同情するように見ていた。あくまでも、見ているだけ。

さわらぬ神に祟りなし、だ。

朝のHRが終了し、漸く元気を取り戻した周。

恋と、なんだかんだで心配してくれていた慶に礼を言つと、職員室へと戻る担任を廊下で呼び止めた。

「お、蒼穹か。どうした？」

担任の名は、井上武。周たち三年の授業を受け持つており、教科は数学。ちなみに、独身である。

「今日、家の事情で早退したいんですけど…」

「蒼穹のことだからサボリじゃないんだろうが、一応理由を聞いていいか？」

基本、真面目で通る周。

加えて成績も上から数えた方が早い位に良いので、教師からの信用も濃い。

「父の大切なお客さんが来るので、それに俺も同席しなきゃならな
いんですよ」

「ああ、お前の親御さんは色々と有名だからな。分かつた、時間に
なつたら適当に抜けて良いぞ」

利名だけでなく、六花も剣道界隈では有名な人物である。

共に学生時代から全国大会で何度も優勝を重ねる程の実力を持つ。
その上利名に至っては、剣道の名門、『蒼穹』を継いだ人物ともあ
つて、各方面に名が広がっている。

そのため門下生の中には、大物政治家や大企業の社長・会長。更に
は剣道を趣味とする有名芸能人など、数多くの著名人が存在する。
尤も、利名はその身分に於いて区別することなく、一般の生徒と同
様の扱いをしているが。

逆にそれが良いとして、より人を集めているようだ。

「はい、有難うございます。帰る時は先生の所に寄つて行きますん
で」

「そうしてくれ。それじゃあ、しつかり授業受けろよ」

そう言って、担任の井上は踵を返し階段を下りて行った。

周も同じ様に反対側を向き、教室へと戻る。

周の席は後ろ寄りなので、後ろ側のドアから入った方が早い。

いつもの通り、後ろから入つて自分の席へと向かおうとしたのだが、
恋と慶がまた何か言い合つている。

それをみた周は、思わず足を止め回れ右。

巻き込まれると面倒なことになるのは、これまでの経験から学習し
ている。

授業が始まれば二人とも止めるので、周は一時間目の教師が来るま
で廊下で待つ事にした。

人が多く、熱気の籠もつた教室と違つて、廊下は閑散としており幾
何か寒い。

時折トイレへ向かう者や、教科書を借りに他のクラスへと急ぐ者が
いる程度で、周のように立ち止まつている人物は殆ど居ない。

「父さんの友達…か」父が珍しく…というより、始めてかもしれない。

自分に会わせたいと言うのだから、余程仲が良い人なのだろう。
昔からとこうことは、恐らく剣道繫があり。

その上父の友人とあつては、腕も相当なものに違いない。

あの人の周りの剣道家は、何故か強い人ばかりが集まつてくる。強者は強者を求めやつて来るのか。

それでも、父が負けた姿を見たことはないが。

周はいつの間にか、思考が脱線していることに気がつく。

利名が早退させてまで一緒に居るよつに、と言つたことを氣にしていたつもりだつた。

しかし、こうも容易く考えが違う所へ行くとなると、周が考えているより頭は重要としているのかも知れない。

「そんなこと、ないとと思うんだけどなあ…」

開けた窓から空を眺めつつ、一人呟く。

そこへ。

「なにが？」

「わっつ！」

「きやあ！」

一度あることは三度ある。

またしても不意に、後ろから話し掛けられ声を上げる周。

その声に驚き、話し掛けた人物 恋自身までも声を上げた。

「なんだ、恋か。ビックリした」

「ビックリしたのはこつち。急に大きな声なんて出して」

「ごめん、ちょっとと考え事してたから」

「考え方? 何を?」

顔だけ恋へと向け話していた周だが、体勢が辛くなつたので体も恋へと向けてから、今朝の事を話した。

「利名先生の友達があ。気になるね、どんな人か」

「うん、俺もそう思つてさ。俺に会わせたいだなんて言うから、余

計に気になつてゐつもりだつたけど……」

「けど？」

恋は首を傾げ、語尾だけで鸚鵡返しに問い合わせる。

「気がついたら別の事考えてて」

「あははっ、周らしいね。それで、別のひとつ、先生来ちゃつた。
教室入る、周」

周はそれに返事をし、開けた窓を閉めてから恋の後を追つ。空が、曇り始めた。

四時間目のチャイムが鳴ると、周はすぐさま帰りの支度をした。机の中にある教科書や、ノートを鞄に詰める。但し、数字は明日もあるのでそのまま置いていく。

少しでも、荷物は軽い方が良い。

「それじゃあね、恋、慶。また明日」

鞄を持つ手とは逆の手を上げ、親しい友人へと挨拶をする。

「なにつ、周帰んのか！？」

ガバッと席から立ち上がり、慶はそのままの勢いで後ろに振り向く。

「うん、父さんに早く帰るよう言われてて」

「そうこいつこと。アンタみたいにサボつて帰る訳じやないんだからね」

周の横に並び、腰に手を当てて話す恋。

「俺がいつサボつた！？」

「先週『頭が痛くて死ぬ』とか言つて、昼休みの間に勝手に帰つてたじゃない」

恋の全くもつて間違いない指摘に、ググッとくぐもる慶。

「頭が痛いんじゃなくて、悪いの間違いでしょ」

さらに一言追撃を食らい、床に手足を付いてへたり込む。

恋はそれを見て、勝つた、とばかりに腕を組み鼻を鳴らした。

「いつそそのまま病院に行つて、バカを治して貰つてきなさい」

「恋、それは言い過ぎじや……」

苦笑しながらも、慶の落ち込み具合を察して恋を諫める。

「いいの。じれぐらい言わないと、コイツはまた同じ手でサボるんだから」

「やかましーわ！周の言つ通り、言い過ぎだー！」

慶は突如立ち上ると、周の台詞に便乗してこじらと反論する。

序でといったように、恋の悪口まで言い始めた。

バカ、アホ、マヌケとお決まりの言葉から、水虫、一キビ、便秘など、微妙に汚いものまで。

それらを言われても、恋は変わらず腕を組んだま。

「ふ、ふん。その程度の悪口、何ともないわね」

どこか思い当たるものがあつたのか、若干上擦つて言い返す。

慶はそれに気付かず続けたが、遂に言つてはいけない単語を言つてしまつた。

「貧乳！」

瞬間。

恋は横に立つ周の鞄を引つたくり、慶の顔目掛けて思い切り投げた。その動きに慶は勿論、周も反応出来ずただ立ち尽くすだけ。

顔面に直撃したことで、そのまま後ろへ倒れる慶。

恋は床に落ちた鞄を拾い軽く埃を払うと、何事もなかつたかの様に周へと手渡した。

「はい、周。利名先生と約束してるんでしょ？早く行かないと」

「う、うん…ありがとう」

呆然と立ち尽くしていたが、話しつけられて何とか動き始める。依然仰向けに倒れたままの慶を見たが、起き上がる様子はない。それどころか、軽く白目をむいている。

完全にノビているようだ。

「コレはほつといて良いから、早く行きなよ

「それじゃあ…また明日ね、恋」

「うん、バイバイ」

そう言って恋は、体の前で小さく手を振つた。

周は手を振返し、教室から出る。

「慶、ごめん。成仏してね
心の中でそう祈り、廊下を走つた。
慶は未だ、倒れたままだ。

第一章（後書き）

一話目です、はい。まだ異世界へと行つてません。相変わらずグダグダと書くのが癖らしく、こうなつてしましました。さて、今回の話で慶がボケ役に決まりました。これから先、彼には高度なボケをお願いしたいと思います。ハードルを上げて期待してみましょう。そして、慶がボケる度に激しいツッコミが待つていることでしょう。そんな訳で、次回よりこの物語は慶によるお笑い成り上がりストーリーとなります。相方には某執事の友人、咲夜さんにお願いします。彼女なら必ずやりとげてくれるはずです。ということで、次回は慶と咲夜さんの出会い編となります。どうぞ失笑混じりでご覧下さい。

第三章（前書き）

えぐれ、感想など頂けると嬉しいと思こます。

第二章

目の前の状況を、周は理解出来なかつた。

全身を覆うプレートアーマーに、顔全体を隠すフルフェイスの兜。右手には両刃の剣を持ち、ダラリと剣先を地面に付けている。

手の部分は、ガントレットを着けていないため素肌が見えており、そのことで中の人間が入つていていることが分かる。

周囲を見渡すと、部屋は円形となつており、甲冑の丁度真後ろに階段があつた。

壁は石で作られているようだが、明かりが蝋燭だけのために薄暗く、はつきりと視認することが出来ない。

周の隣に立つ慶も困惑した様子で、正面に立つ鎧姿のそれを戸惑いつつも凝視し、また、背後に隠れる様にしている恋は、周の裾を掴み小さく震えている。

と、甲冑は睥睨するよつて冑を動かし、己の真正面に立つ周の所で動きを止めた。

そして、右手に持つていた剣を中段の辺りまでグッと持ち上げる。その時甲冑の起こした、ガチャッ、といつ音に、恋の体は一段と強く震え、慶もその音と甲冑の動き反応し、小さく後退る。

ただ、周だけが反応を示さず、冷静に相手の動きを窺うよう見据えていた。

ほんの数分前のこと。

ポケットに入れておいたケータイが揺れた。

授業中は音が鳴るとマズいから、いつもマナーモードにしてある。液晶を見ると、慶からの電話だつた。

「竹刀忘れてるぞー」って。

手入れをするために持つて帰ろうと、教室に置いておいたんだ。

取りに戻ろうと思ったけど、持つて来てくれるって言つから甘えることにした。

靴も履き終わつてたし、有り難い。

それにしても、恋の一撃からもう復活した慶は凄いと思つ。

俺だったら、起き上がる自信がない。

なんて考へてる内に、持つて来てくれた。

なぜか、恋が。

竹刀を受け取り、慶はどうしたのか聞こうとしたら…後ろに居た。

今日は皆して後ろを取る。俺が「ゴルゴだつたら、殺されてるよ。

そんな馬鹿な事を言つて、笑いあつていた直後だ。

歪んだのは。

始めは周りが。

次に、慶と恋。

自分がおかしくなつたと思つたけど、一人とも同じことが起きているらしく、何かを叫んでいる。

恋が倒れ、慶も倒れた。

そして最後に俺が、倒れた。

気が付き立ち上がらると、そこは知らない場所。

辺りを見ると、二人が倒れていたので、声を掛けた。
無事なようで、すぐに目を覚ましてくれて安心した。

二人共立ち上がり、無事を確認し合つ。

その途中、俺たちの後ろから、ガチャ、ガチャ、という音が聞こえてきた。

一斉に振り向くと、そこには動く鎧。

本当に、今日は後ろに縁があるね…。

剣を持ち構える甲冑に、周も足元に転がる竹刀袋から木刀を取り出した。

意図は分からぬが、甲冑は剣を向け、明らかに闘う氣である。今、この場で戦えるのは周だけだ。慶も恋も、武器になるような物は持つていね。実力的に言つても、周が一番上。

本物の刃を持つ剣に木刀では相手にならぬが、それでも無いよりはましだ。

そう考へた周は、慶と恋を壁際に退避させ、自身は一步前へと出た。甲冑姿のそれも周がやる氣になつたと察し、再び構えを正す。そして、自らの内に籠もつたモノを、威圧として放つた。多少顔を顰めたものの、変わらず甲冑を睨みつける。しかし、その後ろに居た二人は堪えきれず、その場へとへたり込んでしまつた。

甲冑はまた音を起して動き出した。

右手だけで持つていた柄に左手を加え、両手で握り直すと右肩で担ぐよじな構えに変えて、左足を半歩前へと出す。

周も木刀を中段で構え、小さく腰を落とす。

足幅も少し広げ、相手の動きに反応出来るようになる。

甲冑は構えたまま動こうとしない。

周も自分から仕掛けようとはせぬ、ジッと相手の動きを待つ。その均衡が数秒。

突如、甲冑が動いた。

剣を担ぐよじにしたまま、周へ向かつて真っ直ぐに走る。

両者に間隔があるとはいへ、この場所 자체が然程広くない。

そのため二人の距離は瞬く間に縮まってしまった。

周は無言のまま後ろに飛び退る。

ブウォン、と剣が風を切る音。

今まで居た位地には、甲冑の剣が再び構えられている。

周は紙一重で攻撃をかわすと同時に距離を取り、なんとか間合いを

上手く測つていた。

だが、甲冑の一撃は大きく、周の想像以上に端へと迫いやられてしまっていた。

周は木刀を握り直し、相手を見据える。

自分の後ろには、恋と慶がいる。

これ以上下がる訳にはいかない。しかし、かと言つて左右に動こうにも甲冑の巧妙な牽制により、上手いことそれも封じられている。

周は覚悟を決め、木刀を強く握り締めた。

(手だ。唯一防具のない、手を狙う)

仕掛ける部位を決め、相手の動きを待つ。

かわして隙が出来た所を打つ、カウンター狙い。

甲冑は周の攻撃を受け止められるが、周が木刀で剣を受け止めることは不可能だ。

兎に角、動きを待つのみ。

ガチャリ、と音を鳴らし甲冑が再び剣を担ぐ。

周も次の一撃に備えるため、足に力を入れる。

甲冑が攻めようと体を傾け、足を前に出しそのまま駆け出した。

甲冑から音が響き、部屋に反響する。

周も構え、相手の振りかぶった両刃の剣を、跳びかわそうとした瞬間。

「こらあああつ、何やつてるのシェリーちゃん！」

階段から突如一人の少女が現れ、大声でそう叫んだ。声は煩いくらいに部屋中へと響く。

甲冑は声に反応し動きを止める。周は逆に反応出来ないが、それで もやはり甲冑同様その場に立ち止まつた。

「まったくもう、危ないから先に様子を見てくるだなんて言つて、剣を振り回してるシェリーちゃんの方がよっぽど危ないじゃない」と、言葉を続けたその少女は、腰に手を当てたまま一步ずつ周達の方へと近づいて行く。

その闖入者に、周は思わず啞然とした。

背は小さく、年齢で言うなら六、七才程度。赤毛の前髪を眉辺りで、後ろと横は肩口で綺麗に切り揃えられている。

甲冑は少女へ振り向くと、剣を床に刺し被つていたフルフェイスの兜を取り外した。

「スマンなミレア、ついな」

そこに見えたのは、蠟燭の火で美しく輝く金糸のよくな黄金の髪。周達の位地からでは後ろ姿しか見えないが、鎖骨まで伸びる金髪と声から女性であることが分かる。

「つい、じゃないよ。せつかく成功したのに、そんなことしたら意味ないでしょ」

「そうだな、すまなかつた」

「もう。それで、どんな人が呼べたのかなつと」

ミレアと呼ばれた少女は、シェリーという少女の横に移動し、遠くを眺めるように額に手を垂直に当て周囲を見回した。

周と目が合う。丁度シェリーの真後ろに居たためだ。

「おおっ、大成功だよシェリーちゃん！しかも男の人だよ男の人、やつたね！」

子供の様に両手を上げて喜ぶ。

そしてそのまま上げた手を、隣に立つシェリーの腕絡ませると、ミレアは嬉しそうに顔を綻ばせた。

自分の腕へと抱きつく少女を見下ろし、慈しむように微笑む。

その姿は、先程剣を振り回していた人物とは思えないほど穏やかで、優美な顔立ちをしていた。

恋と同じ位の背丈であるシェリーと、それにしがみつくミレア。

それはまるで、姉妹のように見える。

だが、いつの間にか周の横に来ていた慶が、場の空気を読まずに一言呴く。

「なんだか、木に張り付く小動物みたいだな」

本人は聞こえない程度で言つた独り言のつもりであったが、響き易いこの部屋では普通に皆へと聞こえてしまった。

シェリーの体に抱き付いたまま、ピクッと小さく揺れるミレア。

「アナタ…誰が小さいですって？」

台詞と共に、顔だけを慶に向ける。

シェリーは空いた手を額に当て、周も同じ様に片手を額に当てて天を仰ぐ。

周の斜め後ろに控えていた志も、ミレアのリアクションからそれが彼女にとつて禁句であつた察し、ヤレヤレと呆れたように肩を竦めた。

ミレアは腕から離れると、先程シェリーが刺した剣を抜き手に持つ。その剣の重量は、本来なら彼女が易々と持てる程軽い物ではない。だが、彼女はそれを物ともせず柄を握ると、剣先を引きずらせながら慶へと一步一歩足を踏み鳴らし近づいて行く。

気のせいか、緑色である彼女の瞳が、怪しく光つて見える。

流石に慶も命の危険を感じたのか、後退り地に手を着き謝り始めた。

「すいませんっごめんなさい！冗談です冗談っ、いやつ、ウソ！」何が冗談でウソなのかは兎も角、誠意は通じたようでもミレアは歩みを止め剣を床に下ろす。

「これでも私はシェリー近づいてと同じ、十八歳なんだからねっ」「フンだ、と鼻を鳴らし親友の下へと戻る。

慶はとつと、はああ～、と盛大に息を吐き出し、「助かったああ」と地面に潰れた。

シェリーの下へと歩いていたミレアだが、ふと足を止め振り返る。小首を傾げ、周を指差す。
とそこから、いち、と一言。
そして次に慶を指し、に。
最後に指を慶へと向け、さん。

それを一度ほど繰り返すと、仲間へと駆け寄り両手を掴み叫んだ。

「どうしようミレアちゃんっ、三人もいるよー！」

慌てふためくミレアに対し、シェリーは落ち着いた様子で、ハハハ、と笑い返した。

「なんだミレア、今頃気付いたのか。私はここに来た時から気付いていたぞ」

甲冑を鳴らし、背を反らす。

「なら早く言つてよおおおおおー！」

その声は、部屋中に響き木靈した。

第三章（後書き）

第三章投稿です。甲冑等について、正直あまり良く分かっていません。間違つていたら、バシバシ御指摘頂けると嬉しいです。

内容ですが、ここで漸く異世界へとやってきました。慶はここでも虜げられました。いずれ桃髪の少女に使い魔として使役されたあげく、犬扱いされることは目に見えています。あんなハーレム展開にはなりませんが。次回、慶が再び異世界へ飛ばされます。おいでませ、ハルニア。頑張れ慶！

「要するに、本当なら一人だけだつたはずが、間違えて三人もこの世界に召喚しちゃった訳ですね？」

「はい…、そうです」

椅子に座つた周が、ミレアが説明した事をオウム返しで確認する。あれから一同はミレアに連れられ、部屋を出た。階段を上り着いた先は普通の民家で、周たちはそこで漸く今までいた所が地下室だつたと理解した。

普通の民家とは言つものの、現代の様なものではなく、石材、または木材で造られている。

それは家屋に限らず家具も同様で、今周たちが座つている椅子やテーブル、棚等も木だけだ。

「ちょ、ちょっと周、そんな話信じちゃうわけ！？」

「そudadぞ周つ、いくらお前が能天氣だからって、今のは無理があるだろ！？」

五人テーブルを囲い、椅子に座つている。周の提案でまずは自己紹介した後、ミレアが現状の説明を始めた。

ここが周達の居た世界ではなく、ミレアの召喚術によつて呼び出されたのだと。

そして、失敗し一人だけではなく、その周囲の人間をも喚んでしまつた、と。

それを要約し、納得したように頷く周。

当然他の二人は信じられるはずもなく、異論の意を示した。

「でもこの状況じゃあ、ミレアさんの話を否定したところどうじうしょうもないじゃん」

「まあ…、そうだけど」

「とりあえず、だな」

周と恋は会話を止め、何か言おうとする慶へと視線を移した。

それに傲い、ミレアも慶を見る。

ただ、ショリーだけは気にする様子もなくお茶を持ち、口くと運んでいた。

「とりあえずだな、俺たちは元の世界で昼飯を食いたい訳よ。そこなんどこどーなんだ?」

「……?えつと……?」

変に冗談を織り交ぜたせいで、慶の言葉が上手く理解出来ないミニア。

「つまりは、俺たちは元いた世界に戻れるんですか?」

周の意訳で、慶の台詞の意味が分かりミレアは小さく笑う。が、その質問へ良い答えが返せないことに気がつくと、ショーンとして俯いてしまった。

「まさか…、無理なんて言つんじゃないでしょ?うねー?」

その様子から察した恋が、強く問い合わせる。

語氣は強いが、その顔は若干泣きそうだ。

「いえっ、ちやんとお返しある」とは出来ます!ナビ…」

「けど、何よ」

「三人もの人を喚んだことで、魔力がなくなってしまいまして」

「…どうこうこと?」

更に恋が問う。

「つまり、今すぐ皆さんをお歸し出来ないんです」

「そんなん、何よそれ!」

恋は熱り立ち、椅子を跳ね飛ばす程の勢いで立ち上がり、ミレアへと怒鳴りつけた。

勝手に異世界へ喚ばれた上に、帰せないとなれば当然のことだ。怒らずにはいられないだろう。

「恋、落ち着いて、ね?」

「でも周、私たち帰れないんだよ!」

「大丈夫だから落ち着いて。ミレアさんは『今すぐ』って言ったでしょ、一生帰れない訳じやないよ。そうですよね、ミレアさん?」

「は、はい。魔力さえ戻れば直ぐにお歸し出来ます」

急に話を振られて吃つたが、それでも自信を持つて答えるミレア。
それを聞いて、恋は不満気ながらも椅子に座り直した。

落ち着き一息したところで、一人が再び声を上げた。

「それですね、ミレアさん」

話し掛けたのは周だ。対するミレアを見つめ、目線を逸らすことなく言葉を次ぐ。

「ミレアさんの魔力はいつ戻るんですか？」

一番重要なのは、そこだ。

ミレアは魔力が戻り次第と言ったのだが、それがどれ程掛かるか周たちにとつて問題となる。

情報のない者にとって、魔力の回復にどれだけの時間が掛かるかなど知る筈もない。

「私の場合は二、三日経てば殆ど回復します。召喚して魔力が空っぽになつたので、全快するには少し時間が掛かるんです」

魔力の回復には、個人差がある。

ミレアのようにゼロから数日で回復する者もいれば、一週間もの時間を受けないと戻らないものもいる。

これは技術の問題で、より魔術に長けた者である程回復が早い。
初心者は当然遅く、玄人は早くなる。

二、三日で回復するミレアは、魔術士としての能力が高いと言える。人によつては、魔力の代謝を無理矢理上昇させ回復出来る者もいるが、それは体への負担が大きい上に、極限られた人物にしか出来ないため、滅多に使われることはない。

ただこれは、あくまでも魔力が全くない場合であり、少量でも残つている場合は回復に掛かる時間がまた異なる。

「それじゃあ、少なくとも今日の内は無理つてことですね？」

「はい…、申し訳ありません…」

うな垂れるミレアに、愕然として椅子に凭れ掛かる恋。話について行けてないのか、ボーッとする慶、そして何かを考えるよう顎に手

を添える周。

そんな中、やはりショリーだけが、一人お茶を飲んでいた。

それからどれくらい経ったか、重たい空気の中やおら周が立ち上がらると、ミレアに向かい少し堅い聲音で彼女の名を呼んだ。

「は、はい、なんでしょうか」

真剣な眼差しで見つめる周に、ミレアは手をギュッと握り返事をする。

慶や恋も、何か思いついたのかと思い、期待をのせ面向けた。

しかし、周りのそんな思惑を裏切り、軽い口調で周は言葉を続けた。

「ご飯にしません？俺、お腹空いちゃいまして」

「……は？」

予想外れの台詞に、三人のズレた声が重なる。

「そうだな、私も腹が減った。ミレア、少し早いが昼食にしよう」今までお茶を飲むだけだったショリーが、ここにきてやっと声を発した。

尤もそれは、周のように場を案じてではなく、ただ飲んでいたお茶が無くなり、且つ彼女の言葉通り空腹を感じただけなのだが。

「ショリーちゃんまで！今はそんなこと言つてる ぐるぐるうううう……」
「ご飯にしましよう」

顔を朱に染めたミレアに、最早異論はない。

慶は先程の言葉通り、恋も昼食を食べる前に異世界へと飛ばされたため、結局周の提案通り昼食を取ることに納得した。
ミレアが調理場に立つと周が手伝いを買って出たので、彼女はそれではと食材を切るよう頼んだ。

こちらの食材は周たちの世界と大した差異はなく、難なく手伝つことが出来た。

とは言つものの、全てがそういう訳ではなく、流石に異なる物があつたため、幾らかたじろいでしまつたのだが。

「おい、恋。なんで男の周が手伝つてるので、女のお前が座つて待

つてゐるんだよ」

「ひるさいわね、今は女だから～なんて言ひ時代じゃないでしょ。料理なんて男女平等須くよ」

「おお、レンは良い」とを言つた

「でしょー？」

「…けどその言い方だと、男も女も料理は出来て当然ってことだよな」

「…

「…

「…

「…

た。

「アマネさんは男性なのに料理が上手なんですね」

「ええ、まあ。母の手伝いをしている内に覚えてちゃいまして」「いいですね」。シェリーちゃんも覚えるとは言わないから、せめて手伝いくらいしてくれればいいのに」

鍋に入ったスープをかき混ぜながら、はあ、と息をつくミレア。そんな彼女を見て、周は思わず苦笑した。

「ところで、ここはシェリーさんと一人で暮らしてるんですか？」

かき回す手が小さく揺れ、スープに書かれた円に歪が走る。

「いいえ、私一人ですよ」

「ならシェリーさんは

」

周が言い終える前に、ミレアはそれを遮り返事をする。

「彼女は友達です。私が一人なのを気にして、今日みたいによく遊びに来てくれるんです」

「そうですか。では、失礼ですけど」両親は？」

ミレアの手が止まる。

「…いません」

「え？」

「大分前に亡くなりました」

「あつ……すいません」

周も野菜を切る手を止め、ミレアの方へ顔を向けた。

「構いませんよ、もう昔のことですから。それに、今はショリーちゃんもいますし」

そう告げるミレアは、優げにそして、可憐に微笑んだ。

「まあ、できましたよー…って、何やつてるんですか、ケイさん」焼けたパンをバスケットに移し、テーブルへと運ぶ途中。うつ伏せになつて床へ寝つ転がる慶を見つけ、訝しげに声を掛けた。

「ミレアさん、そのことなら放つて置いていいわよ。乙女の心へ十足で踏み入つた不届き者に、天罰が下つただけだから

「はあ…」

そう言われると、素直に慶を避けるように足を進める。

周は、時折小さく震える慶に同情の目を向けると、その後何もなかつたように鍋を抱えミレアと同じ様に移動した。

両手が空いていたなら、横にしゃがみ手を合わせていたことだろう。合掌。

「まだ死んでねえ！」

勢い良く起き上ると、慶はどこかに向かつて怒声を放った。

他の四人は、それを可哀想な目で見つめていた。

「ほら、慶。お昼ご飯出来たよ」

「おつ、待つてましたっ」

「飯と聞いて、飛び跳ね席へと戻る慶。

その様子を見て、四人は皆、ため息をついた。

第四章（後書き）

四章が終了です。魔術について、設定を若干書かせて貰いました。話が続けば徐々に追加していく予定なので、どうぞお付き合い下さい。今回も慶は虜められました。一言多いものの、正鶴を射た発言だったような。さて、食事シーンで終了した訳ですが、それにより次回は新たなジャンルに突入します。フードファイト。要は、大食い対決ですね。懐かしい。対戦相手は無敵のチャンピオン、くさな…いえ、井原満です。お題はドラマの最終回を飾った牛丼。次回、慶対草薙…いやいや、井原満のフードファイト。慶の胃が唸りを上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8616d/>

広大な青

2010年10月9日20時30分発行